

6. 杉野屋における青年団

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4983

6. 杉野屋における青年団

吉本亜季子

- I. はじめに
- II. 現在の青年団組織と活動概要
- III. 青年団における変化
- IV. 考察－変化の要因－
- V. おわりに

I. はじめに

性別・年齢別組織とは、性別・年齢を基準にして形成される集団のことであり、多くの地域に存在する。今回調査対象とした杉野屋地区でもこうした組織が存在し様々な活動を行っていたが、一方で解散に至った組織も存在した。婦人部、壮年団がこれにあたる。

そこで本稿では解散する組織もある中、現在でも活動を続け杉野屋地区の代表的な行事である秋祭りの中心を担う青年団に関し、その活動内容と変化、さらにその変化要因と今後について述べていきたいと思う。

II. 現在の青年団組織と活動概要

杉野屋青年団の参加対象は、18歳以上30歳以下の男性のみである。現在は、高校卒業後大学へ進学する者が多いため、大学卒業後に地元で就職し、22歳を過ぎてから参加する場合が増えているようで、実際はほとんどの団員が20歳代半ば過ぎである。参加は任意であり、実際に集落に住所をおいている者で、対象となる21歳から30歳までの男性36名のうち、現在青年団に参加しているのは14名である。

勧誘活動は春先から行われ、区長名義で回覧板が回る他、団員たちがその年度に高校を卒業した者の自宅を訪れたり、電話をかけるなどして行っている。

役職は団長、会計、副団長の3職であり、各役職につき1名で原則1年交代である。現在参加する14名の中から、昨年度の団長が現団長1名を指名し、その他役職については現団長が指

名するが、14名という少人数組織であるため、役職による区別はほとんどない。副団長については全員が副団長経験者であり、会計は団員1名が役を担っているが、会計としての仕事は特にないそうだ。

役員選出については2月の会合で前任者が次期団長を指名する形をとっている。

年会費は5000円となっており、この他、区からの助成金や盆踊りの屋台での収益があるが、これらの多くは秋祭りの花火代などに回される。これは、年間を通じて秋祭り以外での青年団の活動が少なく、費用もそれほどかからないためである。

活動の拠点は集落センターとなっている。

表1 杉野屋青年団の年齢別団員数・加入率(2002年度)

年齢	対象者数	団員数	加入率(%)
18～20	11	0	0.0
21～25	13	3	23.1
26～30	23	11	47.8
計	47	14	29.8

表2 杉野屋青年団の年間の活動内容(2002年度)

月	日	活動内容
2	14	役員交代の集会
8	14	盆踊りの手伝い
8	20～	獅子舞の練習
9	14	秋祭り
11	3	溜池の清掃

表中に示した行事に関し、詳細を以下に示したい。

青年団行事の中で最も重要なのは9月に行われる秋祭りである。この祭りで青年団は獅子舞という重要な役割を担う。獅子舞の予算は、区からの約40万円に盆踊りの収益約3万円を加えたものである。獅子舞の練習は秋祭りの約1ヶ月前に当たるお盆過ぎから始められ、毎晩8時に参加者は集落センター前に集り練習を繰り返す。比較的年の近いOBから声をかけ、練習を見てもらうこともあるそうだ。秋祭り当日は朝9時から始まり、夜10時～12時のクライマックスの宮上がりまで交代で班長の家、新築された家、団員の家、神社、観音山の前などで獅子舞を舞う。

獅子舞に必要な人員はオガヤに5名、コガヤに4名、ペッサイ1名（各役の意味については9章参照）天狗2名の計12名であり、現在の団員数から考えると獅子舞ができるぎりぎりの人数であることは容易に想像できるだろう。そのため、交代要員として青年団OBも参加し、2002年度は天狗としてもOBが参加していた。祭りが終ると集落センターで飲み会をし、その後センターの清掃を行い、OB宅へ挨拶に回り、礼状を書くなどし、後日慰労会が開かれる。

この他、2年に1度溜池の堤の清掃が青年団により行われる。杉野屋には溜池が2つ存在し、2年ごとに交代で清掃を行っている。放水は前日の晩から行われ、その状態を確認するため団員達は前日の晩から集落センターに待機し、翌日早朝から堤の清掃にとりかかる。毎年の春に溜池組合により鯉の稚魚が放流され、山手にある溜池には鯉が200匹近く生息し、清掃の際に鯉を捕まえ希望者の家に届ける場合もある。溜池にはブラックバスが生息し、清掃の際に悩まされることが多いようだ。以前は水量調節に藁や麻袋が使用されていたが、現在は水門によつて調節されているため頻繁に清掃する必要もないのではないかという意見も聞かれた。

会合については定期的に開かれることはなく、会合が開かれる場合でも、各個人の仕事の都合で参加者は少人数になるようだ。しかし、秋祭りや役員交代の時期にはほぼ全員が参加する。

この他に慰安旅行や、青年団主催の行事ではないが、公民館分館活動や地区の行事への参加も見られる。分館活動としては盆踊りが挙げられる。2002年度は8月14日に集落センター前にて行われた。婦人部の解散が決定された2002年度からは、分館活動として杉野屋民謡会や健康クラブが中心となって行われ、仮装して踊る人も見られたようだ。青年団は踊りに参加するのではなく、櫓を組み、屋台を出す形でこの活動に参加している。焼きそばなどの簡単な屋台を出し、その際区から受領する助成金と屋台の収益は秋祭りの費用に使われる。

地区行事としては、志雄町民グランドゴルフ大会へ参加、協力をしている。この大会は春季、夏季、秋季、と年に3回志雄町多目的運動公園にて、地区間の交流促進を目的として行われている。

III. 青年団における変化

この節では、まず年代別に杉野屋青年団について記述し、その後現在の活動と比較してみたいと思う。

戦後まもなくの1940年代後半には、青年団参加者は現在の約6倍に当たる、80余名が参加していたと言われている。終戦直後は年齢制限が30歳までとされていたそうだが、90人近くが参加し人数が多くなりすぎたため、25歳までが参加対象となり、参加対象年齢の村落内の男性は

ほぼ全員が参加していた。当時参加していたA氏（70歳代の男性）によれば、「参加するのが当たり前で、参加しない者は村八分になるような意識があった」そうで、任意加入という形でも半強制的側面が強かったようだ。会費は無く、現在集落センターのある場所に青年団クラブという建物が存在し、夜になると自然とその場に青年団員が集り、宴会を催して私的なつながりを深めていたようである。

当時の秋祭りの獅子舞では、交代人員も多く、獅子舞に入ることが競争であり、年長者から選ばれることが基本だが、獅子係と呼ばれる、獅子舞の練習を監督する年長の青年団員が練習を見て獅子舞に入るメンバーを決定していた。また、人数が多くなったことから1人ひとりが獅子舞に参加できる時間が限られていたため、各自舞いの中に個性を出しておらず、見る側を楽しませていたようだ。また、獅子舞演者が休憩を取る際には、青年団のOB達が獅子頭を奪い、蚊帳を使って“ドラガヤ”と称し若い衆に負けじと舞を披露していた。

盆踊りについては、この当時は青年団と婦人部を中心となって行っていた。場所は現在と同じであるが、男女関係無く踊りの輪に参加し、仮装する者が多かった。当時はこうした活動の他に、8月に観音山で相撲大会が行われ、人々を楽しませていた。相撲大会の経費は終戦後2～3年間は青年団が材木を切り出し、それを売る事で得ていたが、利益、資金ともに不足したため1950年には相撲大会は催されなくなった。また、このころには人々は青年団を退団した後30歳までの5年間壮年団に参加していたそうだが、人数が多くなりすぎ、まとめる人物がいなくなつたために解散している。

次に1960年代前半の青年団についてまとめたい。この時期参加者は30人程度であり、退団年齢は1945年代と同じく25歳とされていた。依然として「青年団に入るのは当たり前」的な考え方方が一般的であったにも関わらず、青年団参加者は減少しつつあった。その対策として、家々を回り勧誘し、また参加年齢の者の親に参加を促すよう頼んでいたそうだ。当時の役員選出について述べると、自ら就きたがる人はおらず、まず年長の団員がすぐ下の年齢の団員から性格重視で副団長を指名し、その者が副団長を経験した後団長になっていた。上下関係は今よりは厳しく、秋祭りが近づくと厳しさを増していたそうだ。1945年頃と同じく、当時も獅子舞の演者は年長者から優先的に選ばれていたが、交代要員として下の団員にも舞う機会が与えられたようで、1曲舞えるだけでも大変名誉なことだったという。

1960年代後半に入ると、年齢制限は25歳から徐々に伸び始め、30歳でも活動に参加する者が始めた。参加者数について詳しい情報は無いが、しかし、この時期に青年団員と同年代の独身女性が10人程度自発的に青年団活動に参加していたようである。キャンプなどの活動への参加や、獅子舞の衣装の修繕の他、獅子舞にも実際に参加していたそうだ。以上のことから、参加者は1960年代と比較すると減少していたと思われる。1960年代前半の団費についてははつ

きりしていないが、1960年代後半には团費として各自500円を納めていた。仕事の都合上県外に出ていたため活動に参加していなかったB氏（50歳代男性）もこの年会費は納めていたそうだ。団員の上下関係については、年齢の違いはあるものの、同年代的な付き合い方をしていた。役職についても年功序列によっていたが、特に厳しい決め方ではなく、当時参加していたC氏（50歳代男性）によれば、「お前が団長するなら俺が副団長する」という様にして決められていたようだ。この当時の盆踊りでは男女とも踊りに参加し、仮装する者も中にはいた。溜池の管理については、現在と同じく2年に1度行われていたが、この当時は鯉を食べる者が多く、家族も喜ぶため釣り感覚で楽しい活動だった。水の調節には藁が使用されていた。また、こうした活動の他にもこの時期には様々な活動が行われており、公道の清掃といったボランティア活動から、先述したキャンプ、サイクリング、ボウリングといった娯楽性の高い活動も青年団活動の一環となっていたようだ。

1970年代になると、年齢制限は30歳までになり、これが現在まで続いている。女性の参加はこの時期には既になくなっている。年会費は1000円程度であり、役職に関しては、団長、副団長は団員全員で選び、人望の厚い人物が役職に就いていたそうだ。必ずしも、副団長経験者が団長になるのではなく、あくまで団員の意志による決定がされていた。参加者は30人以下であったが、実際に活動していた者は15人程度で名前だけ登録されている者が半数を占めていたようだ。この時期参加していたD氏（40歳代男性）は仕事場が集落外のため活動には参加していなかつたが、父親が会費を納めていたそうだ。参加できなかつたことに引け目を感じていたようで、依然として「青年団に参加するのは当たり前」という意識があったと考えられる。勧誘方法としては、区長名義で回覧版が回り参加を呼びかけ、また在所にいる対象者については参加者から電話で勧誘を行っていた。

こうした中で、獅子舞への参加については練習への参加が必要不可欠であるため、実際に活動に参加している者でなければ、獅子舞に入ることができなかつた。先述したように、この当時実際に活動に加わっていたのは名簿にある人数の約半数であったため、OBに協力してもらい、獅子舞を行っていたようだ。また、この時期に1960年代に青年団に参加していた者達により青年団が再結成された。青年団活動へ参加しなくなるとともに村落内の人々との結びつきが薄れしたことから、結成に至つたそうだ。祭りへの自発的な参加や、公道の空き缶拾いなどを活動とし、30歳から45歳までが参加対象となっていたようだ。

これ以降2002年度までの間の青年団に関する情報が少ないため、以上に記述してきたことを踏まえ、現在の青年団との違いについて、以下に取り上げたいと思う。

まず青年団へ参加する際の意識に大きな違いが見られる。これまでの記述から、青年団に参加することは長年当たり前の事として考えられてきた。実際、1970年代に参加していたD氏

(40歳代男性)に参加理由について尋ねると、「理由を考えた事はなく、参加するのは当然だと考えていた」という答えが返ってきた。現在参加しているE氏(20歳代男性)に尋ねると、同じく「在所にいるなら参加するのが普通だろう」という答えであったが、参加しなければ白い目で見られ、活動に参加しない者も会費を納めていた頃とは違い、現在は参加しないからといって白い目で見られる事はなく、あくまでも任意参加という、参加しない者を容認する風潮が感じられる。集落外へ勤め、仕事の都合上時間が取りにくいことを、実際に参加している団員、また集落の住民達自身よく理解しているからなのかもしれない。

次に挙げられるのは獅子舞への参加についての意識である。これは青年団員数と密接に関わっている。団員の人数の多い時期は先述したように、獅子舞に参加できること自体に価値があり、各自が思い思いの獅子舞を演じようと努めていた。年配の人に話を聞くと、「昔の方がすごかつた」という話をする人が大半であった。現在は人数が少なく、1人が何度も獅子舞に参加する必要がある。また、1人ひとりの演じる回数が多い事に対して、獅子舞参加者からは、体力的につらいため休憩時間を増やして欲しい、という声も聞かれた。獅子舞への人々の思い入れが強いため、1人ひとりに潜在的に求められる事は多いだろうが、人数不足という現実問題との間で、青年団員は自分らしさを出すよりも決まった舞いを何度も演じる事に専念せざるを得ない状態となっている。

また、決まった行事以外の自発的活動が行われていない、という点も大きな違いではないだろうか。先述したように、1945年頃には夜になると自然と団員が集り、1965年頃には積極的に娯楽的活動が行われ、団員達の交流を促していたと考えられるが、現在は新しい行事などは行われていない。また、団員が皆集まって交流するような活動を今後行う予定はあるか、と問い合わせてみたところ「やるべきだとは思うが、実際に行動に移そうとは思っていない」ということであった。計画しても実際に参加者が集まるかどうか、といった心配もあるようだ。

最後に、青年団内の上下関係について述べてみたい。年齢による上下関係は自然と存在していた、という見方がされることが多かったのだが、現在は先述したように実際に参加している青年団員の年齢は20歳代半ばであり、比較的年齢の近い男性が集まっているため、同年代と同じ接し方をすることが多いそうだ。1965年頃に参加していたC氏(50歳代男性)は「今は友達同士の集まりのようになっている」と指摘していた。

IV. 考察—変化の要因—

ここでは、前節で記述した変化を受け、その要因について述べていくのだが、この変化要因は外的要因と内的要因とに大別できると考えた。そこで、ここではその2つの観点から考察したい。

まず、変化の外的要因について述べたい。表1で示したように、青年団の各年齢における参加率を見ると、20歳以下が全く参加していないことが分かるだろう。これは、大学への進学率上昇が主な理由と考えられる。杉野屋は他の菅原などの地区と比較すると1戸あたりの耕地面積が少ないということもあり（3章表1参照）、以前から公務員や教員になる人物が多く、教育に対する関心は高かった、ということが多くの人から聞かれた。

F氏（70歳代女性）によると、「1950年代頃から大半の人が大学へ行き始め、最近は県外の大学へ進学する子も多い」ということである。他県の大学へ進学し、卒業後もその地域に残り就職する人が多いことが、20歳代前半の青年団参加者減少の原因になっていると思われる。また、大学へ進学せず就職する場合でも、飲酒の可能性があることから未成年で青年団に参加することを快く思わない親もいるようだ。

就業形態が変化してきたことも青年団への参加率低下の大きな理由であると考えられる。もともと青年団は集落内での生業を主とする者達が参加し、様々な活動を通じ互いの交流を深め、労役的活動や獅子舞演舞を通じ集落にも貢献する組織であった。1940年代後半～1960年代までは集落に残り農業に従事する若者が大半であった。1章の表8によれば1960年代は農家の比率が高かったのに対し、1995年には農業以外から収入を得る非農家や第2種兼業農家が多数を占めている。兼業農家の形態についても、1章表9によると、恒常的勤務をする世帯が増加していることが分かる。現在の団員のほとんどは公務員、会社務めのサラリーマンから構成されているが、この就業形態の変化による問題点は、各自が集落外へ勤め、各自の仕事内容が異なるために、何か活動をする際に時間の都合が合わない、ということである。農業従事者が多数を占めていた頃は、同じ仕事を生業とするもの同士でコミュニケーションを取りやすかつたという利点が挙げられるのだが、現在は各自の生活が異なっているため連絡が取りづらい、という問題が生じている。このことが、先述した「新しい活動をしようとしても人が集まらないのではないか」という不安にも影響していると思われる。

1940～1960年代に比べ、娯楽が多様化している事も青年団の変化に影響を与えているだろう。娯楽が少ない時期は青年団として皆で活動すること自体に娯楽的因素があり、そのため積極的に人々が参加し活動を展開していたと思われる。1940年代後半に、夜になると青年団員が集まっていたこと、1960年代に盛んに娯楽的活動が行われていたことから青年団が人々の娯楽の場で

あつたことは明白だろう。しかし、娯楽が多様化する近年は、パソコン、テレビなど身边でかつ個人で楽しめる娯楽が存在するため、青年団で集まり楽しもうとする風潮はほとんどないと思われる。こうした事が、青年団参加者の不足、活動のマンネリ化の原因になっているのではないだろうか。

こうした進学、就職、娯楽の多様化を受け、集落の住民自身も青年団に対し厳しく口出しできない状態になっている。青年団に対し、「昔のほうがよかった」と語る人は大勢いても、実際にこうすべきだ、と語る人はほとんどおらず、続けてくれるだけでいい、という雰囲気が感じ取られた。「何事も子供の自由にさせよう」という考え方を持つ親が増えたことも一因になっているかもしれない。

次に、青年団の変化の内的要因、つまり青年団内部の要因として考えられるのは、団員の青年団に向ける関心の希薄化が挙げられるだろう。集落外へ出る機会が多くなったことと関係し、親しい人間関係が集落内ではなく、集落外で形成されることが多くなり、個人的な活動が増加したと思われる。これに加えて、娯楽が多様化したことから青年団に向ける団員の関心が薄れしてきたと考えられる。必要以上の活動をしないことや、団内に上下関係がほとんど存在しないこともその影響ではないだろうか。

表3 杉野屋青年団参加対象者数(人)

年齢	現在	5年後	10年後
18~20	11	7	9
21~25	13	24	13
26~30	23	14	24
計	47	45	46

資料出所：「広報しお」（2002年8月）

表3は今後10年間の青年団の参加対象となりうる人の数を示したものである。ここからは人数自体の大きな変化は見られないが、実際には今後ますます集落外へ出る者は増加し、青年団参加者は徐々に減少するのではないか、と予測される。そのため積極的な勧誘活動、また獅子舞を継承していくための何らかの改善策が青年団により行われることが必要であると思われるが、参加を強制にすることに対しては、「強制にしたことで青年団内の雰囲気が悪くなってしまう」、「強制にしたことで青年団内の雰囲気が悪くなってしまう」、「強制にしたことで青年団内の雰囲気が悪くなってしまう」という答えが返ってきた。団員獲得のための改善策として、退団年齢を引き上げることに対し、現在参加しているE氏（20歳代男性）は「自分の代に延ばそうとは考えていない。延ばしてもまた同じことが繰り返されるだろうから」ということであった。1960年代後半のように

女性が参加することについては、「最終手段だろう」と話していた。獅子舞を続けていくために、菅原地区では高校生、中学生が獅子舞に参加しているが、こうした対策についても、特に考えていはないようだった。青年団内でこうした今後のための話し合いが積極的に行われていないことも、内的要因の1つではないかと思われる。

また、青年団という組織 자체が住民の生活に果たす役割が弱まっていることも要因だろう。1940年代後半に行われた材木切り出しや溜池の清掃といった活動から、当時は青年団が集落の必要とする労役的役割を果たしていたと考えられるが、先述したように溜池の清掃について、清掃する必要はないのではないかという意見もあり、労役的性格は薄れてきていると感じられる。また、外部との接触が少ない時期の重要な情報交換の場という性格も薄れてきている。

しかし、こうした状況にも関わらず周辺集落と比べれば比較的男性の青年団参加率が高いこともまた事実である。現在も、常時集落内にいる者の大半が参加し、集落にいるが参加していない者は2、3名である。このことは、青年団の大切な活動である獅子舞を続けていこうとする、住民達の意識の表れなのかもしれない。

「獅子舞は実際大変だが、やはり続けていきたいし、自分の子供にもして欲しいと思う」

(29歳男性)

「獅子舞はなんとかして続けて欲しい」(77歳男性)

「獅子舞はかっこいい、自分もやってみたい」(9歳男児)

「自分も参加してみたいけど、女だから無理だろう」(17歳女子)

「やりたいけどここに残るかは分からぬ」(16歳男子)

「獅子舞を子供にして欲しいとは思うけど、強制はしない」(41歳女性)

これらは、獅子舞に関する住民の意見の一部だが、集落に住む多くの人が獅子舞を続けることを望んでいた。今も昔も、杉野屋の人々にとって獅子舞は憧れの対象であり、継承すべきもの、という考え方が多いようだ。だが、獅子舞は青年団がするもの、と知っていたかという問い合わせに対しては、多くの人が「獅子舞は好きだったが、誰がしているか考えたことはなかった」、現在参加しているF氏(20歳代男性)は「小さい頃は青年団活動だとは知らなかつた」、秋祭りの宮上がりを見物していた高校生は、「獅子舞はしてみたい」と答えていたが、青年団に参加したいかと尋ねると「分からぬ」という答えが返ってきた。このように、必ずしも青年団と獅子舞が結びついていない、という点も特徴だろう。これは、青年団員が獅子舞を舞うことを誇りに思い、青年団の存在意義と捉えていることと相反している。青年団活動を明確にし、獅子舞の継承と青年団活動活性化につなげることが今後は必要となってくるだろう。

以上のように、外的・内的要因について述べてきたが、今後活動を継続させていくためには、こうした要因を踏まえ、住民1人ひとり、団員1人ひとりが青年団組織の持つ意義、これまで

果たしてきた役割について再考してみる必要があるのではないか。同時に、子ども会などの他の地区組織とのつながりを強め、集落全体で活動を支える意識も必要となるだろう。

V. おわりに

最後になったが、各地区の青年団活動を促進する志雄町の新しい取り組みについて少し触れておきたい。志雄町では1967年頃に青年団協議会が発足した。この活動は、志雄町が地域間の交流を促す目的で、各集落の青年団団長に呼びかけ、志雄町の文化祭など様々な行事への積極的参加を促すものであった。中学校の体育館を借り芝居一座を呼ぶこともあったそうだ。2ヶ月に1度定例会が開かれ、各青年団長が参加していたそうだが、年々参加者が減り、1970年代以降は名前だけが残り、参加者も市の役員のみで構成されていた。しかし、2002年に入り、再び積極的に活動を展開し、参加を呼びかけている。2002年8月号の「広報しお」によれば、「青年団同士の友好を深め、地域青年団の発展を目的とし、白峰遊歩道の清掃や成人式、志雄文化祭でのイベント協力が中心となっていたが、活動内容がマンネリ化し参加人員が減少したことを受け、役員を一新し地域青年団との連携に力を入れながらボランティア活動など新しい行事へ挑戦していく」ようである。男女を問わず現在参加する青年を募っている。今後各地区的青年団活動による影響をもたらすことを私としては期待したいと思う。

以上、杉野屋青年団という組織について述べてきたのだが、私が青年団について調査しようと思い始めたのは、実際に秋祭りでの青年団の獅子舞を見てからである。人数不足、勢い不足を感じさせられることなどなく、ただただその力強さに圧倒されていた。調査を進めるにつれて、問題点が多く山積していることを知ったが、青年団に参加している人々は皆楽しんで活動していることがよく伝わってきた。青年団に参加したおかげで町内での人間関係の幅が広がった、という意見も耳にしていたため、改善すべき問題は多々あるとは思うが、この活動の楽しさ、良さを少しでも多くの住民の方々が再認識し、今後も青年団の舞う獅子舞、青年団という地区組織が継承されていくことを願いたい。